

農業の未来をつくる

私たちの食を支える「農業」。下妻市では、米をはじめ野菜や果樹、畜産など多種多様な農産物が生産され、それが市の大きな魅力でもあります。しかし、高齢化が進み、担い手不足や耕作放棄地の増加など多くの課題も抱えています。一方で、後継者として就農し、希望を胸に、地元で農業を営む若者がいます。今月号では、市内で活躍する若手農業者の姿を通して、農業の魅力ややりがい、さらには下妻の農業の未来を探りたいと思います。

01 下妻市果樹組合連合会青年部

副部長 **塚田 祐貴**さん(33)
 塚田 **樹**さん(25)

梨を栽培しています

果樹組合連合会青年部は、梨栽培をしている青年が集まって、若い力でなにかできればという思いから結成。
 ●人数 20人 ●年齢層 20～50代
 ●結成年 昭和57年

「就農されたきっかけは？」
祐貴 最初は梨農家になりたくなかったんです。ですが、祖母や先輩方が「やりがいのある仕事だよ」と言っていたので興味を持ち、25歳で就農しました。
樹 東京の大学に通っていたのですが、3～4年生の時がコロナ禍で実家に帰っていました。実家が梨農家なので、手伝っている内に実家を継ごうという気持ちになり、大学を卒業してすぐに就農しました。

「青年部ではどんな活動をしていますか？」
 果樹組合連合会は約90人いますが、青年部は20人いますので、青年部が約2割を占めています。美味しい梨を作り続けたいという思いから、若い世代も徐々に加入しています。
 昨年は高度技術確立事業の一環として、梨の棚上げを行いました。ほかにも、梨園地継承事業や先進地研修会を行っています。

「梨の棚上げは祐貴さん発案だと伺いました。きっかけを教えてください。」
 梨の棚上げは、業者に頼めば簡単ですが、頑張れば2～3日でできるんです。若い部員も増えてきましたので、コストを抑えることも重要だと思い、技術を身に着けるためにも青年部で事業化しました。

「梨園地継承事業はどんな事業ですか？」
 梨栽培を辞めた方の園地を管理し、梨農家になるための研修を受けている人が独立する際に、その園地を継承する事業です。果樹組合連合会、青年部、JA常総ひかり、下妻市、茨城県が一丸となって行っています。
 青年部に限らず、皆さん教えることを嫌がる人が1人もいないんです。出し惜しみすることなく、技術を教えてください。



塚田 祐貴さん



「農業を始めて嬉しかったことは？」
祐貴 花合わせ(受粉)がうまくいったときです。実がつかなかったら冬の作業も無駄になってしまいうので、何年やっても、不安になります。びっしり実がなっているのを見ると、1年間頑張った証なので、嬉しくなります。

「農業を始めてご自身に変化はありましたか？」
祐貴 天気予報をよく見るようになりました。天気予報のアプリ3つを駆使して、雨雲などを見えています。
樹 早起きができるようになりました。今までは早く起きる習慣がなかったのですが、規則正しい生活ができるようになりました。また、明日雨が降るといことが風で分かるようになりました。



塚田 樹さん

02 下妻CLST(クラスタ)

主にズッキーニ、キャベツ、白菜を栽培しています

会長 **中島 好一**さん(42)

下妻 CLST は、新規就農者、若手農家が集まった団体。英語で集団を意味する「cluster(クラスタ)」が名前の由来。

●人数 10人 ●年齢層 20～40代
 ●結成年 平成29年

「就農されたきっかけは？」
 最初、農家になりたいとは思いませんでした。実家が農家で、忙しくしている姿を見ていたからです。
 そのため、専門学校卒業後、花を扱うところに就職しました。その当時、実家でも花を扱っていて、農家もいいなと思うようになり25歳のときに就農しました。

「農家になるためにまず何をしましたか？」
 25歳のときにワーキングホリデーでオーストラリアに行きました。飛行機に乗るのも初めてで緊張しましたが、農業を学ぶため、挑戦しました。オーストラリアには、3か月間留学し、語学学校に通いながら、農場でバナナを育てて働きました。

「下妻CLSTについて教えてください。」
 メンバーで年に1回レタスを作ったり、ノウハウを覚えたりするだけではなく、意見交換も行ってみんなで意識を高めています。メンバー全員熱意がありますので、集まると話が止まりません。切磋琢磨しながら、相談し合える良い仲間です。

「ズッキーニを育て始めたきっかけは？」
 元々実家では、白菜、スイカ、メロンを育てていました。露路栽培は雨の日にできない作業が多いことから、ズッキーニの栽培をハウスで始めました。ズッキーニは花合わせと収穫が主な作業で、ルーティン化すれば育てやすい作物です。

「今後の目標を教えてください。」
 現状維持です！大きくしたいという気持ちも多少ありますが、現状を保つことも大切なので、頑張ります。

